

藤並の森

Vol.20

高知県立
文学館



●「春が来た（本山町早明浦ダム下）」（写真提供／北岡香子）

リレー随筆② 「死」に向かう態度—兆民と子規— 十川 信介

このところ知人の訃報が相繼いだせいか、次第に死が身近に感じられるようになった。もちろん死は恐ろしい。そんな時、漠然とながら心に浮かぶのは、中江兆民と正岡子規の死に対する対照的な態度である。

喉頭ガンで余命一年余と告げられた兆民は、あくまでも理性的に、残された時間を『一年有半』正統の執筆に当てる。腐敗した政界への攻撃、越路太夫らの名人芸に出会う至福、文学界の様相、「ナカエニスム」と名づける「無神無靈魂」の哲学概説。その中でふと抒情的色彩がこぼれるのは、土佐の風物を想う望郷の念と、遣される妻への気遣いである。——泉州、浜寺の海辺を妻と歩きながら彼は考える。男子の自分は修養して「理義」に通じ、死に面しても「楽地」をみつけて苦痛を忘れることができる。だが女性の妻が「余の如く自得悠揚たる」態度をとれないのは当然である。負債だらけで死病に侵された今の状態はまさに悲惨だ。彼は冗談めかして妻に言う。「お前も四十過ぎて、自分の死後もう再婚の望みもない。いっそこで一緒に入水しようか。」そして彼は妻とともに「哄笑」し、南瓜と杏を買って家に帰った。迫り来る悲しみを振り払うように、声をそろえて笑う夫婦の姿は感動的である。

ともてに食べるのは一種の「楽み」かもしれないが、その感情は「理」に従った「あきらめ」であって、「美」を感じた「理屈」ぬきの「楽み」ではない。兆民には「美」ということが分かっていない。「昼の曇り去りて夕顔の花の白きに夕風そよぐ」ような情景こそ「美」であり本当の「楽み」なのだ。『一年有半』は実際のことで、内容は浅薄である、と。

この時彼は三十四歳、兆民より二十歳以上も年下である。その世代的な距離が二人の自己表現や対他関係の違いを生んだとしても、むしろそれは、より基本的には「理屈」によりて全く支配せられぬ「感情を率直に表現しようとした文学者が、「理」を通して感情を抑制しようとした哲学者の記述に感じた反発だったのでないか。子規は苦痛に泣き叫び、しかも、母や妹に感情を爆発させる自分の狂態をつぶさに書きとめた。しかしその彼も「御馳走の食ひをさめ」には、二人と楽しみを共にして「看護の勞」に酬い、一方の兆民にも越路太夫の美声に酔う恍惚の瞬間があった。子規に従えば前者は「理」に落ちた行為であり、後者は「美」との出会いということになる。その意味では、子規の批判が全面的に当たっているとは言えない。

「理」と「自然の情」とのどちらを選ぶかは人それぞれだろうが、私たちが凡人には、この二人のように強い精神で死に向かう態度を取れそうもないことは確かである。

（日本近代文学館専務理事・学習院大学教授）

◆次回企画展紹介◆

2003年5月23日(金)～6月12日(木)
ミニ企画「折口信夫短歌展」

折口 信夫

民俗学者であり、歌人でもあった折口信夫（大阪府出身、一八八七—一九五三）と土佐とは、意外に深いゆかりがあります。吾川郡伊野町にある楳本神社前宮司の故・杉本建夫氏は、国学院大学で折口の教えを受けた愛弟子でした。そのため、折口は土佐への旅の途中、何度か杉本氏のもとを訪れており、現在も楳本神社には、折口から送られた直筆の筆墨が多く所蔵されています。今年むかえる折口信夫没後五十年を記念し、楳本神社に所蔵されている数々の資料のうち、とくに、自作の歌を書いた筆墨や、全国各地の折口歌碑の拓本を展示公開するミニ企画「折口信夫短歌展」を開催します。

現在の楳本神社宮司の杉本瑞井氏により、このミニ企画へ寄せられた文をここに紹介します。

「折口信夫先生から
いただいた折々の歌」

杉本 瑞井

私の父杉本建夫が折口先生からいただいた筆墨はおおむね三つに分類できる。その一は歌集『海やまのあひだ』『春のこつぶれ』などに収められている大正から昭和初期にかけての約二十点の筆蹟である。

第二は土佐路で詠まれた作品、先生は昭和二年八月、十数日を土佐に滞在、昭和十七年には二日間、同十九年には四日ほどの来高が記録されていて、私の所以外の作品も含めると約二十点ほど残されている。

第三は父をはじめ私も家族について詠まれた歌で、冠、婚、葬、祭の折々に詠まれたものがほとんどである。

この小文ではこの第三の作品群について、年次を追ってご紹介させていただくことにする。

【昭和六年】

「字満連児乃女濃子能家遊贈来志陶之
白壺見乍志笑万由」

万葉仮名で白壺に書かれてある。「うまれこのめのこのいへゆおくりこしすゑのしらつぼみながらしゑまゆ」と訓むので

あろう。

私より一歳年上の姉が生まれたのは、昭和六年八月一日であった。内祝いとして、先生に揮毫していただき壺を、親戚、知人に配った。姉の「しのぶ」という名は、先生のお名前をそのまま頂戴したものである。姉が生まれる前、男の子の場合には、「信夫」と漢字そのまま、女の子であったならば、「しのぶ」と仮名書きでというお話を、先生からいただいていたということである。

内祝いの壺の数は、全部で七個であったようだが、家にある他の一つは判読に苦しんだ。多くの方に教えていただいた末、結局

「うまれこの名におふしのぶ青々とさせばかなへりすゑのしらかめ」とよみとることができた。

姉の生まれるすこし前の昭和六年四月から昭和八年にかけて、二年間ほど先生の甥にあたる福井融さんという方を私の家にお預かりしていた。先生の出身地は大坂で、福井家は、先生の姉「あゐ」の嫁した家であるが、もともと、先生の父、折口秀太郎は、その福井家から折口家に養子に來た人であった。種々の事情で福井融さんは、生まれながら折口家の一員のようにして育ってきた人である。姉の「あゐ」も、東京の先生の家を手伝って、同居した時もあった。

融さんが私の家から神奈川県川崎中学校に通っていた二年の間に、姉の「しのぶ」と私が生まれたことになる。

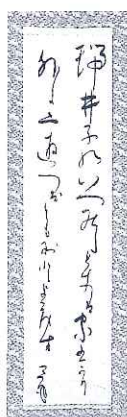
私は昭和二十八年に国学院大へ編入学で入ったが、先生の最晩年の半年間、入寮のお世話になり病気の時はデンワをかけてくるように細かいお気づかいをいただいた。わづかの月日だったが今から考えると冷汗三斗の思いがする。これほどまでお気をかけて下さったのは、二十年以上も前に福井融さんのお世話を父母がしたことと関係があるように思われる。大阪人としての律儀さ義理固さと言うこともできようか。

【昭和十二年】

姉が七歳、私が六歳の昭和十二年、大井出石のお宅へお邪魔した時、書いていただいたという半切が掛軸になって残っている。

姉しのぶの七つのお祝いに詠まれた歌「ななつこはものをぞほりすふる国の土佐のみかみよき殿をたべ」その時、ついでに私に書いてくださった歌

「瑞井子はいへ居るときは家ひかり外にし遊べばともぞとよます」



今この歌に向かう時気恥ずかしい気持ちでいっぱいになる。

この二つの歌を父は、祖母の形見の帯を使って表具してもらったという。

【昭和十八年】

「知り人は みな散りくくになりゆけど、老いづきて思ふ。生けるはたのしき」

歌集「倭をぐな」に収められている歌で、「建夫、土佐に帰る」の前書きが添えられてある。

昭和十八年四月、私の父、杉本建夫が川崎中学校の教員を退職して、故郷の土佐に帰るに際しての歌である。

【昭和二十三年】

昭和二十三年二月十二日、丹毒から敗血症を引き起こして、私の父は死亡した。四十八歳であった。三月十五日付の先生からの手紙には、次のようにしたためられてある。

「思ひがけない事が出来ました。驚きの外は御座いません。さだめて、てんだうするほど御驚きになったこと、思ひます。思へば長いつきあひでした。いつまでも思ひ出すことせう。」

此一月香川徳島へ旅行した時、足をのばして御目にかゝりにいったら、それでも御目にかゝれたらうにと悲しみの心、いろくくり返し思うて居ります。

又、御目にかゝって御くやみ申しあげるをりも近きにごさいます。

瑞井大切に御育て下され、幸、小生無事に居ましたら、故人のあとつぎとして恥ぢない人にしてあげたいと思ひます。

アワタバシク逝キシヲ思フ我友ヤ君白
ラモカナシムラムカ
あわたゞしくゆきしを思ふわが友や君
みつからもかなしむらむか 迢空

折口 信夫
杉本かねい様（並べて）瑞井様

【昭和二十八年】

私の姉、しのぶが藤原鴻一郎と結婚したのは、昭和二十八年一月四日であった。そのことを報告したのは、姉であったか、母であったか知らないが、その折に、先生からいただいた手紙が、現在東京に住む姉のもとに残されている。

「しづかな御家庭に時がたつて、再び花咲く春が参りました。それを心に浮かべて楽しく感じます。

瑞井さんが来て呉れまして以来、病気が勢を得過ぎて、とうく去年の秋ぐちからずつと学校を休みました。もうすっかり良いんですが、手紙だけは代筆してもらっています。

しのぶさんが此度は、美しい生活に居られること、さう思ひ乍ら、時の速さに驚きました。何時書いたとも、覚えてゐない歌が、表装せられたのを拝見して、今日のお祝ひに私も一人加わってゐるやうな気がして、嬉しくもあり、改めて、杉本君をはつきり感じました。よいお婿さんらしいのも力強く感じます。奥様には長々御苦勞でした。こ、もう一ふんばりだと思つて、

お社の為、お家のためにおつとめ願ひます。又結構なかまほこ頂戴、いろく工夫してよばれてをります。

何をお祝ひしても珍しくありませんから、数日中、気分の良い時を見計らつてこんどはその七つ児が立派な嫁ごになった祝ひの歌を本願寺三十六人集台紙の色紙に書いて送ります。

では皆様めでたくお年をお重ね下さい。」

そして、宛名は、杉本しのぶ様、奥様、瑞井の三人になっており、日付は昭和二十八年一月二十一日になっている。

年譜によると、前年の二十七年の八月ごろから健康がすぐれず、九月二十日、国学院において講義中、言語に障害を感じ、二十二日に自宅において軽微な脳溢血の如き発作があった。大学の講座も休講して静養につとめた。十一月六日、第二国立病院で、内臓、血管には異常が認められないとの診断で、十二月には大学の講義に一回だけ出講している。

一月には、ほとんど健康も平常の状態に回復しようだが、この手紙は岡野弘彦氏の筆跡である。

そして、手紙に書かれてあるように、何日かたつて、「祝ひの歌」が贈られてきた。紫の紙と水色の紙の二枚に、次の歌がした、められている。

「むこのきみに
むすめあづけて
うらやすし わが名を
とりて
おひいでし
こを

信夫

同封の別紙には、私どもが読みとることができないことを考えられて、片仮名

書きで

「ムコノ君ニムスメアズケテウラヤスシワガ名ヲトリテ生ヒイデシコヲ」とあり、さらにそれに続けて

「紫の紙を前にし、水色を後にして、適当につきあはせて下さい。

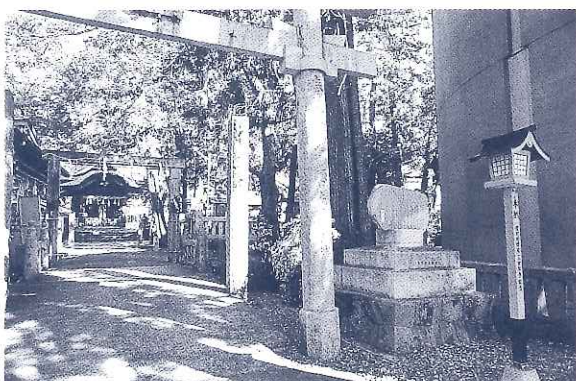
本願寺三十六人集の式紙ハ書きつづしくしましたからこれにします。

それでは幾久しく。
志のふ様ならびに

藤原鴻一郎様
積迢空

この歌は、その年の九月三日に他界した先生の筆蹟としては、最期に近いものと思われる。

（この文章は「日本文学研究」第二十号に掲載した「折口信夫先生と私の父そして姉と」を抜粋、加筆したものです。）



杉本神社と歌碑

学芸員メモ

「愛の手紙展」—文学者の様々な愛のかたち—資料から

観覧者の皆さんは、企画展「愛の手紙」をどのようにご覧くださったのだろうか。

今回はじめて、日本近代文学館を中心として、自由民権記念館、安芸市歴史民俗資料館などのご協力で、文学者の「手紙」を中心とした企画展を開催した。

前回もふれたが、手紙は、文藝作品や文学者の日記とは違い、公表を予期することなしに書かれているのが殆どである。ゆえにプライベートに属する事柄が多く、文学者の手紙といえども、中には公表できない場合もある。

しかし、作品の執筆動機をはじめ、作品理解の鍵となる事実が述べられているものも多く、貴重な文学資料の一つとなる場合が多い。

また、芥川龍之介の手紙などに見られるように、文学者の人柄、人格が作品よりも手紙から、より鮮明に窺われることは決して稀な事ではなく、「文学者の手紙」は、読者に文学者と同じか向きあう機会を与え、文学者を身近な存在へと駆り立てる。そして、それぞれ違った角度から、作品世界へといざなってくれる。手紙には、そんな、不思議な魅力がある。

今回の企画展では、第一部が「愛する人へ」、第二部が「妻へ」、第三部が「家族へ」という三部構成に、「土佐人の愛の手紙」のコーナーを設けた。

夏目漱石、太宰治、芥川龍之介、島崎藤村、大町桂月、室生犀星、萩原朔太

郎、与謝野晶子、有島武郎、黒岩涙香、寺田寅彦、馬場孤蝶を含む四十数名の作家の手紙の他にゆかりの品々を含め、約二百五十点が会場を埋め尽くした。

「愛する人へ」の手紙からは、高揚した、あるいは苦悩に満ちた、あるいは情熱的なさまざまな愛のかたちが。また、「妻へ」の手紙からは、優しさ、あるいは心遣いのこまやかさ、あるいは葛藤をともしなした心情の姿が。また、「家族へ」の手紙からは、肉親に宛てたものでもしかみられないであろう事実が赤裸々に述べられており、血肉のつながりの強さが伝わってくる。

それでは、展示した手紙の一部をご覧ください。「愛する人へ」のコーナーの島崎藤村から二度目の妻加藤静子に宛てた手紙。島崎藤村といえは、「若菜集」「破戒」などで知られる、詩人、小説家として最もポピュラーな作家の一人である。最初の妻冬子を失って以来、男手一つで四人の子供を育て、執筆活動に専念していた彼は、姪との過失を機に、パリで三年間の謹慎生活を送ることとなる。このことは後に『新生』でその経緯を告白しているの、皆の知るところである。帰国後、彼の前に表れたのは、当時、女性の自立を促す雑誌「処女地」の編集助手だった、二十四歳年下の加藤静子。写真を見る限りでは、口元のきりつとした、落ち着いた雰囲気との似合

う女性である。津田英学塾卒業後の翻訳を手がける職業婦人といった感じには、

見受けられない。五十三歳の藤村に求愛された静子は、当時二十九歳。諸事情を抱えた藤村に戸惑いながらも、徐々に彼女は惹かれてゆく。

今回、展示されている手紙は、静子の結婚内諾の手紙を受け取った日に藤村によって書かれたもので、静子の家族への配慮とともに、静かな愛を育んできた二人の様子が窺われる内容となっている。

「(前略) 昨日は兄さんにいるのご相談して頂くことが出来うれしく思いました。お父さんにももしこの秋あたり東京に御滞在でしたら式の当日にはお出願ひ其節おめに懸りたいと思ひます。Strange existence! 実に無造作にこんなお便りを書く日の来たといふことすらわたしには不思議なくらゐです。」昭和三年、二人は結婚。心身ともに安定を得た藤村は、壮大な歴史小説「夜明け前」へのスタートをきることとなる。

次に、「妻へ」のコーナーから、芥川龍之介から妻文に宛てた手紙をご紹介します。今回、展示した芥川龍之介の手紙は、妻文に宛てたものと、子どもたち宛てたもの、計四通がある。芥川龍之介というと、理知的、厭世的、冷笑的といったイメージが強い。

しかし、妻や家族に宛てた手紙からは、そういった龍之介のイメージを彷彿させるものは、微塵もない。

「昨日、カルイザワの停車場より宿へ行く途中、自働車にのりしに、その自転車、向うより来る自動車をよけんとして

電柱に衝突し、乗合ひの中学生一人重傷を負ひ僕は田の中へ投げ出され、その拍子に左の腕を折り、目下軽井沢病院入院中。院長は並米利加人にて中々親切なり。誰も来る必要なし。一週間中に退院の筈。(但シコレハミナウソ)」としたためられており、汽車の写真のある裏面には「原稿用紙ヲオクラレタシ。五トヂバカリ、コノハガキヲ多加志へ見セ。コレハナニカトキクベシ」とある。よく読めば違和感を感じる内容のはがきである

が、誰もが釘付けになり一気に読み、驚かされ、そして、ほんと胸をなでおろす。この短い文章の中に、読む側の連心の動きを熟慮している様が窺える。ユーモアと鋭眼を備えた芥川の本質がいま見る。細々とした用件とともに心を許している妻にだからこそ書ける内容でもある。家庭に安らぎの場を求めた芥川の姿が見え隠れする。また、手紙では、必ず子ども達のことにも触れられており、その文面から、親バカぶりも伺えるだろう。また、龍之介が亡くなる二カ月前に子ども達に送った手紙も今回展示されたが、その手紙からは、死を感じさせ

るものは何もない。

そして、最後に「土佐人の愛の手紙」のコーナーより、黒岩涙香(本名周六)から二度目の妻の寿賀夫人に宛てた短い手紙をご紹介します。

政治家、新聞経営者、探偵小説家、翻訳家、実業家、思想家いくつもの顔を持つ涙香。その中でも当時幅広く支持され

書籍ご紹介



『小説 野中兼山』

田岡 典夫 著

2002年秋の「田岡典夫没後20年展」が契機となり、直木賞作家田岡典夫の畢生の大作『小説野中兼山』全三巻がこのたび復刊の運びとなりました。国益に尽すあまり苛政によって民衆を酷使したとも言われる野中兼山ですが、治世三十二年で失脚、死後婉ら遺族は宿毛に幽閉という悲劇に見舞われます。土佐藩の置かれた当時の状況から総合的に観て、やはり、兼山は「時代を超えた一流の人物」であつたとし、熊沢蕃山らに比し知名度が低いことを「シバテンの嘆」として嘆いています。

その野中兼山と彼の生きた時代を、政治・社会・歴史・民族・土木工学・交通など、さまざまな角度から照射し、何度も高知を訪れ、実際に現場を踏み、見られる限りの資料を駆使して実証的に描き、昭和54年、毎日出版文化賞を受賞しました。

山内一豊とその妻、二代藩主忠義といった藩上層部の人々のほか、実務に携わる武士や下層の人々まで、さまざまな人間像が作家の曇りのない眼で描かれます。また近世土佐を揺り動かした事件を追体験し、未開だったころの土佐の山野・海辺を西から東まで旅することもできます。婉ら遺族のその後を史実から追った「兼山残響」兼山余韻も余韻深いものがあります。

絶版となつて久しく再版が待たれていましたが、ここに関係者のご尽力により待望の復刊となりました。

(別後)

復刊のご案内

『小説 野中兼山』全3巻(復刊)

発行 平凡社
発売 (株)フッキング
予価 9,524円(本体価格)

①分売不可のセット販売。送料380円、荷着時払いの代引きご利用の場合、別途手数料300円必要。

②申し込みはインターネットとなります。書店での販売は予定なし。

予約開始予定 2003年4月7日から
お届け予定日 2003年5月17日

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-1-8

TEL03-32333-153336

FAX03-32333-153337

http://www.fukkan.com/



黒岩涙香から大友寿賀宛(明治41年12月)
安芸市歴史民俗資料館所蔵

た新聞「萬朝報」を代表とするジャーナリストとしての彼の業績は大きい。寿賀夫人は、三河武士の娘で、当時赤坂で芸妓「栄龍」として売れっ子であつ

た。この手紙は、明治四十一年(一九〇八)八月に先妻と離婚後、付き合っていた大友寿賀(清)二十三歳に宛てて書かれたもの。「雪に伏したる 小枝に問へば やがて花さく 春が来る」最愛の寿賀殿 四十一年十二月「涙香」といった俚謡正調(都々逸)で書かれており、「今はまだ妻にしてやる事ができず にすまないと小枝(寿賀)に言うと、ご心配はいりません。きつと添え遂げられる日がやってきます。その日を楽しみに私は待っております」と答えてくれた愛しい寿賀さんへ。」といった内容のものであるうか。寿賀は、涙香の死後もこの手紙(恋文)をととても大切に、巾着袋

にいられて常に持ち歩いていたという。二人は、明治四十三年二月に入籍、涙香が亡くなる大正九年十月六日までの約十年間結婚生活を営む。その間三人の子供にもめぐまれ、「腹の周六」と呼称された程辛辣な涙香だったが、彼女との結婚生活で随分と温厚になったという。寿賀の死後、遺骨とともにこの手紙も、当時彼女と一緒に住んでいた涙香の五男・五郎の妻利子の手によって埋葬されたようだが、昭和四十八年(一九七三)十一月二十四日に周六の長男日出雄の妻良恵を埋葬した時に、寿賀の遺骨を入れた木箱が腐り、遺骨とともに一部欠落したこの手紙が発見され、復元表装された。現在は

安芸市歴史民俗資料館が所蔵している。このように、文学者達にもそれぞれの人生があり、ドラマがある。「手紙」は、読者がある時代の文学者のもとへ、また、文学者の作品へといざなつてくれる。

(津田加須子)

土佐日記 紀貫之

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。

その年の、十二月の、二十日あまり、一日の、威の時に門出す。そのよし、いささかに、ものに書きつく。
或人、県の四年五年はてて、例のことども、みなし終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ知る知らぬ、送りす。年ごろ、よく比べつる人々なむ、別れ難く思ひて、日しきりに、とかくしつづののしるうちに、夜ふけぬ。

土佐のまほろばここにあり

いちめんに冴えわたった淡青の空。廻路石を過ぎ、廿枝の坂を下って国府（南国市国分）の里に足を踏み入れるたんびに、空の広さに驚く。ちまちました街中に住んでいる者に不意打ちをくらわすように、本当の空を繰り広げてくれるようだ。東から西に流れる国分川も、大きすぎず、小さすぎず、荒々しさも寂しさもない、おだやかな川である。兩岸に沿った田圃は古代からそのままそこに在ったかのように、ひろびろと展開している。

一千年の昔、この里は、わが国最初の「日記文学」誕生の契機となった土地であった。そんな遙かなことに、少しばかり想いをめぐらせてみれば、路傍のタンポポも、悠遠の抒情を奏でてそよいでいるようである。「古今和歌集」の選者として名高い紀貫之が国司（知事）として土佐に赴任、四年間の任務を終えて、承平四年（九三三）十二月、大津を出発、京に帰着するまでの五十五日間の海路日記が「土佐日記」である。

天候不順、海賊襲来への危惧、国府で亡くした女兒への追慕、と屈託多い旅であったが、歌人らしく五十九首の歌を盛り込んだ「歌日記」でもある。

女性の筆に託したひらがな文は、漢文全盛の当時としては非常に日新しく、それ以後「かげろふ日記」「和泉式部日記」「更級日記」など王朝女流日記の輩出をみた。貫之の土佐任地のおかげである。ついでに記せば、「古今和歌集」巻七、賀歌の冒頭のわがきみは千代にやちよにさしれいしのいはとなりてこけのむすまでは、国歌「君が代」の元となるもの。

となれば、地元の人たちが国家的人物貫

之を放っておくわけはない。貫之景仰の先鞭をつけたのは儒学者尾池春水。寛政元年（一七八九）、貫之邸跡（国司館跡）に顕彰碑を建立（わずか九坪）。以来これを主碑として、時の権力者、国府村民が順次、整備、拡張をはかり、現在、田圃の一画に三千平方メートルの広さをもつ美しい小公園となったのである。

貫之邸跡に隣接する庭園には、さまざまの趣向がほどこされている。優美な山水の畔を色彩る八草花の庭には、

秋の菊にほふかきりはかざしてん花よりさきと知らぬわが身を一貫之

たか秋はあらぬものゆゑをみなへしなぞ色にいでてまだきうつるふ一貫之などの木札が立ち、「古今和歌集」に詠みこまれた菊、をみなへしが植わっているという演出ぶり。かえて、柳など二十数本の樹木が並ぶ八樹木の庭もまた然り。いながらにして「古今和歌集」を体感できる巧みな庭づくりである。

史跡保存に情熱を燃やす国府史跡保存会会長の竹内隆造さん（六十八歳）は「ほとんど毎日来ます」とおっしゃる。チリ一つ落ちていない気配りに、尋常でない愛着ぶりがうかがえる。

子供の遠足コース、諸団体の来訪、そして歌人、俳人たちの訪れもひんぱんで、吟行会も年に十数回はある。竹内さんが願っているのは、ここが新しい文学の発信基地になること。学習館を建てることだという。近くに「土佐国衙跡」がある。

（国則三雄志）

見どころ●国分寺●比江廃寺跡●永源寺

●卵塔●阿波塚●地藏渡し●比江山城跡

資料受贈報告

（平成十四年十二月～平成十五年二月）
敬称略

▼横田晴光「城西館」―藤本楠子伝
―里見義裕「城西館」他▼江川俊郎「赤い橋」江川俊郎「さきたま出版会」▼南部典代「草の葉47集」草の葉同人編刊▼出海溪也「出海溪也詩集」出海溪也「土曜美術社出版販売」▼山川久三「顔の花」スケッチブックエッセイ―山川久三著刊「他」▼川田民子「俳句好日・俳話好日」雪遍路「川田朴子」勾玉社「他」▼小松弘愛「詩と思想」詩人集二〇〇〇年「詩と思想」編集委員会「土曜美術社出版」▼植田馨「たんじまんじの記」植田馨「猿書房」▼細川幹夫「トヨタ成長のカギ―創業期の人間関係」細川幹夫「近代文芸社」▼山田雅子「童謡と私」山田まさ子他「中央文化出版」他▼上森千秋「一句集」黒潮上森千秋「高知新聞企業」▼野本幸雄「歌集」白雲「野本幸雄」短歌新聞社▼田中瀧治「土佐日記」紀貫之関係・上佐文人関係資料「三三八点、四四〇冊」：紀貫之（生年未詳）九四五）は歌人として名が高く、延喜五（九〇五）年醍醐天皇の勅命により紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑とともに我が国最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の撰にあたりやがて二十巻を完成して奏上しました。貫之の入集歌は百首を超えました。「かな序」も執筆しています。この「かな序」の中で「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」と和歌を定義づけこの考え方は後世の歌論に大きな影響を与えました。また能書家としても知られ「伝」貫之筆」とさ

◆◆◆ 文学館日誌 2002年12月～2003年2月 ◆◆◆



寺田寅彦展記念講演会 (12/8)

12月

◆8日 寺田寅彦記念講演会「寺田寅彦の高知」講師榎原忠彦氏。文学館ホール。午後2時～午後3時30分。参加者35名。◆14日 平成14年度2回目文学カレッジ「上林暁の人と文学」講師は県経営者協会専務理事松本秀正氏。午後1時30分～午後3時。参加者38名。吉村淑市・千穎氏ご来館。◆15日 寅彦とシネマ第4弾『制服の処女』(1931年・独・87分) 文学館ホール。午前11時～午後2時の2回上映。参加者40名。◆18日 志村くみ子夫妻と親戚の方ご来館。◆19日 城西中学校2年生38名。引率者1名観覧。◆21日 ギャラリー・トーク(学芸員による解説) 2階企画展示室。午後2時～午後3時。/第33回朗読の会(梨の念)。第1部「新美南吉の世界」、第2部「郷土作家の作品」。文学館ホール。午後2時～午後4時。参加者30名。◆22日 かみしばい研究会。/NHK松山文化センター14名様ご来館。◆26日 年末年始休館日平成15年1月1日まで。

1月

◆5日 ギャラリー・トーク(学芸員による解説) 2階企画展示室。午後2時～午後3時。◆12日 平成14年度第3回目文学カレッジ「宮沢賢治―土佐との関わり」講師は高知大学教授鈴木健司氏。午後1時30分～午後3時。参加者37名。◆13日 森下時男夫妻ご来館。◆18日 第34回朗読の会(もちもちの念)。「二つの雪の物語」。参加者31名。◆19日 「寺田寅彦展」5日終了予定を好評につき延長して終了。期間中入館者1,753名/寅彦とシネマ第5弾『三文オペラ』(1931年・独米・108分) 文学館ホール。午前11時～午後2時の2回上映。参加者35名。◆25日 かみしばい研究会。

◆1日 平成14年度第4回目文学カレッジ「高知の詩人」講師は詩人小松弘愛氏。午後1時30分～午後3時。参加者37名。◆4日 「愛の手紙展」文学者の様々な愛のかたち」開幕。3月16日まで。◆12・13日 庵文学賞作家山田まさ子氏・山川禎彦氏来館。(山田まさ子さんは、この春高知を離れ上京。東京で新たな作家修業をスタートされる。一層のご活躍を期待したい。)◆14日 カルチャーサポーター研修会。参加者22名。◆15日 第35回朗読の会。「さまざまな愛の手紙―愛する人へ、妻へ、家族へ、土佐人の愛の手紙」。参加者30名。吉村淑市・千穎氏ご来館。◆22日 かみしばい研究会。/ギャラリー・トーク(学芸員による解説) 2階企画展示室。午後2時～午後3時。

現在販売中の図録等一覧表

高知の文学―常設展示図録	2,100円
師弟が見た時代―漱石と寅彦の留学体験	1,260円
浜本浩とその時代展	1,050円
夏日漱石・芥川龍之介展	840円
ヴィジョン―片山敏彦の世界1,365円	365円
智恵子抄展	2,000円
司馬遼太郎展―19世紀の青春群像	2,100円
石川啄木―貧苦と挫折を超えて	1,260円
没後50年田中英光―純粋な魂の奇跡	840円
岡本弥太生誕百年記念展	
―新世紀の詩人たち	630円
没後40年追憶の吉井勇	840円
宮尾登美子展	630円
幻の童謡詩人「金子みすゞの世界」	2,000円
土佐の反骨「田岡領雲」	1,000円
土佐のむかしばなしと伝説	630円
おあん、婉、お馬：土佐の近世の女性と文学	700円
パリ憧憬―日本文学者の ハフランス体験展	840円
棟方志功展	2,100円
田岡典夫―没後20年	800円
近世土佐の文人たち(講座レジュメ)	500円
講演記録「流風余韻」(第1集～第3集)	各630円



田中さんの資料を中心とする常設展「土佐日記」コーナー

れる書跡が数多く残されています。貫之は延長八(九三〇)年正月土佐守に任せられました。そして、承平四(九三四)年にその任を終え十二月海路土佐を発ち翌年二月京に帰りますが、この道中の模様を後日日記の形としてまとめたものが「土佐日記」です。成立は承平五年頃と考えられています。文章は貫之に随従して帰京した女性の手に成るもののように書かれており、和文の文体を確立した古典文学として評価の高い作品です。貫之自筆本は現存せず「藤原定家書写本系統」「藤原為家書写本系統」など四系統の書写本として伝えています。今回田中さんから寄贈いただいた資料はこのような書写本の複製や江戸期以降現代に至る土佐日記の板本・写本・注釈書・研究書、また貫之自筆本(複製)や貫之家集、伝記・研究書、その他土佐の文人関係資料を含めきわめて充実した内容となっています。このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

高知県立文学館カレンダー

2003年

4～6月

4月—April

5月—May

6月—June

収蔵資料名品展

- 会期／平成15年4月29日(祝・火)～5月15日(木)【15日間】
- 内容／新収蔵資料や収蔵資料の中から近現代・近世資料の名品を紹介。長屋秋香・島本蘭溪資料・片木太郎油彩画・田中貢太郎肖像画・森下雨村書簡、土佐国職人尺歌合せほか。

折口信夫短歌展

- 会期／平成15年5月23日(金)～6月12日(木)【18日間】
- 内容／歌人折口信夫(釈道空)の筆墨と歌碑拓本を集める。土佐や土佐人との関わりをも紹介。伊野町の根本神社との共催。

日本文学原作の映画上映会第四弾!!

『足摺岬』

- 監督・吉村公三郎
- 原作・田宮虎彦「足摺岬」
- 出演・津島恵子、木村功、日高澄子

〔日時〕 4月6日(日)

・第1回上映 AM10時～

・解説

「田宮虎彦と映画

『足摺岬』について」

PM12時00分～12時40分

山川 禎彦氏

(高知文学学校運営委員)

・第2回上映 PM12時50分～

・第3回上映 PM14時50分～

〔場所〕 文学館ホール

〔入場料〕 500円

〔定員〕 各100名(当日先着順)

北と南の民話交流のつどい

福島一の民話の語り部・横山幸子さんが来高! 雪国のむかしばなしを生で聞いてみませんか? 参加自由。お誘い合わせの上、どうぞご参加ください。

■4月22日(火)14時～16時

■文学館ホール

入場無料・申込不要

作家の肉声を聴く

森下雨村語る「推理小説今昔」

■4月29日(火・祝)

30日(水)

■14時～14時半 文学館ホール

入場無料・申込不要

高知県立文学館 平成15年度文学専門講座

毎回一つのテーマをとりあげ、掘り下げていく専門講座。今年、酒と旅をこよなく愛した明治の文豪・大町桂月について学びます。

大町桂月 人と文学

～酒と旅を愛した文人～

■講師／高橋正氏
(高知工業高等専門学校名誉教授)

※すべて13時30分から15時

※文学館ホールにて

①4月26日(土) ④7月26日(土)

②5月24日(土) ⑤8月23日(土)

③6月28日(土) ⑥9月13日(土)

〈申し込み方法〉

ハガキに郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記の上、文学館「専門講座係」まで。文学館受付にて直接受付も承ります。定員80名(先着順)。

次回企画展

中村太郎写真展「宮沢賢治 幻想紀行」

平成15年7月20日(日・祝)～8月31日(日)【37日間】

「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」などの作品で愛されている宮沢賢治の幻想的な世界を写真家・中村太郎氏の作品パネル約70点で紹介。

【休館日】4月—3, 14, 21, 28日 5月—6, 12, 19, 26日 6月—2, 9, 16, 23, 30日

今年度の展覧会予定

- 林芙美子生誕100年展—花のいのちはみじかくて— 9月14日(日)～10月19日(日)
- 永遠のグリム童話展 11月15日(土)～12月21日(日)
- 良寛展—詩と書とその生涯— 平成16年1月2日(金)～2月1日(日)
- 愛の手紙展—青春編— 平成16年2月11日(水・祝)～3月21日(日)

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。(一般550円)
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
E-mail bungaku@tosa.net-kochi.jp
http://www2.net-kochi.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850